

## 当館のカメラコレクションについて（その3）

\*金田幸代

Sachiyo KANEDA

**要旨：**現代産業科学館という名を持つ当館が収集対象とする、いわゆる理工系資料は現在（平成 25 年 3 月末）で寄託資料を含め、2,492 点を数える。「現代産業の歴史」「先端技術への招待」「創造の広場」という 3 つの常設展示室で常時展示している実物資料及び模型、実験装置類のほか、収蔵庫において、テレビ、ラジオ、テープレコーダー、家電製品、コンピュータ関連製品、電球、電子管類、自動車、蒸気機関車模型等を収蔵している。その中でカメラ及び関連資料のコレクションは現在約 750 点と充実したものとなっている。これまでに平成 19 年度研究報告第 14 号と平成 21 年度研究報告第 16 号においてカメラコレクションの資料整理経過と資料群の概要について報告を行った。本稿はその 3 として、平成 22 年度及び 23 年度に収蔵したカメラ関連コレクションについて報告し、改めてコレクション全体的見直しをし、今後の活用を図るものである<sup>(3)</sup>。

**キーワード：**科学館資料 カメラコレクション

### 1 はじめに

当館のカメラコレクションは平成 17 年度に千葉県市川市在住の小久保勝弘氏のカメラ及び関連資料 136 点の寄附を受け、平成 18 年度に福井県坂井市所在の称名寺住職の故・佐々木智夫氏が収集された 279 点のカメラコレクションを佐々木須磨子氏から寄託されたのが始まりである。

当館は大量生産が始まった時代から現代までの資料を収集対象とし、対象分野は①産業領域（千葉県の産業（工業）・科学技術・産業遺産など）②工学領域（電気・電子工学関係・機械工学関係・材料工学関係・生命工学関係など）③理学領域（物理関係・科学関係・生物関係など）④博物館学領域と幅広い。その中でカメラのコレクションが充実しているのは、この二つの大きなコレクションが軸となり、「開館 15 周年記念 収蔵資料展『カメラの世界 - なつかしの名機・大衆機たち - 』（平成 21 年 10 月 10 日～11 月 23 日）」等で公開したことで、さらにカメラに関する情報をいただき、新たな寄附につながっていったからである。

小久保氏からは平成 21 年度に 130 点、平成 22 年度に 16 点、平成 23 年度に 31 点のカメラ及び関連資料の寄附をいただいている。佐々木コレクシ

ョンは寄託という形であるが、平成 21 年度には収蔵資料展で借用したライカ 12 点をコレクションに追加した。

これら“小久保コレクション”“佐々木コレクション”の資料整理経過及び資料群の概要は平成 19 年度研究報告第 14 号<sup>(1)</sup>と平成 21 年度研究報告第 16 号<sup>(2)</sup>で報告を行っている。

平成 22 年度と平成 23 年度は、千葉県柏市在住の上野誠氏から 67 点、東京都大田区の写真店「山田写真荘」の関係者である靱山将英氏と靱山貞美氏から 61 点、小久保氏から続いて 47 点のカメラ及び関連資料の寄附をいただき、当館カメラコレクションの充実を図ることができた。

ここでは平成 21 年度研究報告第 16 号「当館収蔵のカメラコレクションについて（その 2）」以降に収蔵したカメラ及び関連資料についてその概要を報告し、国内外のカメラの歴史や技術の発展において、どのような位置づけができ、今後どのように活用することができるかを探してみたい。

### 2 上野誠氏寄附カメラ関連資料について

上野誠氏は元プロのカメラマンで、当初は科学写真を、のちに商業写真を撮影されていた。平成

21年度の収蔵資料展をきっかけとして、上野氏が仕事で使用されていたカメラや趣味の写真技術史探究により収集したカメラおよび関連資料の一部を当館に寄附したいという申し出をいただいたのである。平成22年度に37点、平成23年度に30点のカメラ及び関連資料を収蔵した。

内訳はカメラ40点、レンズ3点、露出計2点、シャッター関連2点、フラッシュ（ストロボ）関連7点、フィルム関連7点、暗室電球1点、その他アクセサリ類5点である。（別添資料一覧1）

これら資料の中でまず注目すべきは、これまでの当館のカメラコレクションでは少数であった子ども向けの簡易カメラである。



図1 アニー10

「アニー10」「アニー10 スーパー」「プリンスB-1」は高級一眼レフを模した子ども向けのボルト判カメラ。裏紙に35ミリフィルムを貼ったロールフィルムを使用する。日本では低価格カメラとして戦後広まった。特に1950年代から、小・中学生向けに生産されたボルト判カメラの市場に数多くのメーカーが参入した。

「アニー10」（図1）の左上にある、一見レンジファインダーに見える窓はシャッターロックの表示窓で、巻き戻しノブはダミーである。シャッター速度は標準とBの2段階のみ。レンズは焦点固定の単玉となっており最短撮影距離は2m。ストロボ撮影も可能である。1958年に豊栄産業から発売された。

1960年発売の「アニー10 スーパー」は「アニー10」の上位機種で、シャッター速度が1/50. 25. Bの3段階になっている。

「プリンスB-1」（図2）は1970年にプリンス光学から発売された。シャッター速度の調整はな

い。巻き上げと連動していないため、何回でもシャッターが切れてしまう。絞りは8と11の2段階のみ。レンズは単玉のレンズ。プリンスD-I、D-IIなどの系列機種がある。



図2 プリンスB-1

このほか、子ども向けカメラとして、110フィルムの小さなトイカメラを11点収蔵した。110フィルムは1972年にコダックが発売したフィルムで、カートリッジに16ミリのフィルムが納められている。



図3 セルビマイクロ110

110カメラはフィルムカートリッジの特性を利用した多彩なボディがつけられた。「セルビマイクロ110」（図3）はフィルムカートリッジを本体の一部として装着するデザイン。岩田エンタープライズ製で1984年に発売された。大きさは幅90mm×奥行30mm×高34mmの手のひらに隠れる大きさで、フィルムを装着しないときは、フィルムと同じ形のコインホルダーを付けるようになっている。このようなデザインの110トイカメラは、ヤドカリカメラ、キーチェーンカメラなどと呼ばれた。

メルボ製の「ちび丸」は「セルビマイクロ」と同じように110フィルムカートリッジをカメラ本体に利用するデザインで前面の図柄がカラフルで多彩な種類が発売された。「ちび丸 Special SHONENTAI」（図4）は当時のアイドルグループのサインが写り込むというもの。付属のカートリッジをつければサインなしの普通の写真が撮れる。



図4 ちび丸 Special SHONENTAI

自分で「ちび丸」を組み立てることができる「ちび丸 工作館」(図5)という工作セットも発売された。



図5 ちび丸 工作館

「せっしゃトルペー」(図6)はレンズの横にある接写レンズをスライドさせると25 cmまで接写できる110カメラ。着脱式のストロボがついている。ラジオ付きタイプ、ストロボ・ラジオ付きタイプもあった。ドンキーボックス製。



図6 せっしゃトルペー

「スポーツ35」(図7)は35ミリフィルム使用の子ども向けカメラである。4つの固定レンズがあり、シャッターを押すと4枚連続の連動写真が撮影できる。台湾製。(3)



図7 スポーツ35

このようなプラスチック製の安価なカメラは1980年代から1990年代にかけて大量に生産されていたが、2000年ごろから急速に普及した一般向けデジタルカメラに取って代わられた。

上野氏の寄附資料のなかで、さらに注目すべきコレクションは、コダックの4点と国産カメラの昭和初期から1960年代までの、カメラ技術の発展がうかがえる貴重なカメラ16点である。



図8 No.2A ブローニー モデルC

イーストマン・コダックの創業者ジョージ・イーストマンはロールフィルムを発明し、写真を一般大衆のものとした。1900年に発売したボックスカメラ「No.1ブローニー」は当時1ドルで売り出され、誰もが写真を撮れるようになった。

この「No.2AブローニーモデルC」(図8)は1924年にイギリスのコダックが発売した。ロールフィルム116フィルム(画面サイズ6.5×11センチ)を使用。ボディはアルミニウム、標準レンズはメ

ニスカスレンズ、シャッターはロータリーシャッター。外装の色は4色あり、アメリカコダック製と異なった。



「ベストポケット・オートグラフィック・コダック モデルB」(図9)は1925年発売のベスト判クラップカメラ。ロールフィルム127フィルム(ベスト判画面サイズ4×6.5センチ)を使用した小型軽量のベストポケット・コダックは1912年に発売され爆発的に売れた。オートグラフィック方式は専用フィルムと裏紙の間にカーボン上の薄紙を挟み、裏ぶたの小窓を開いて付属の鉄筆で上書きすると文字が露光されて記録されるしくみである。



図10 ジフィーコダック Six-16

「ジフィーコダック」は、フロント面が飛び出すデザインで人気があった。ファインダーは2か所あり、縦、横両方撮影出来るようになっている。「ジフィーコダック six-16」(図10)は616のロールフィルム(画面サイズ6.5×11センチ)を使用する。616フィルムは120フィルムが好まれるようになって次第に使用されなくなり、1984年に製造中止となった。



図11 ブローニー127

「ブローニー127」(図11)は1953年発売の127フィルムを使用するイギリスコダック製の入門カメラ。ボディはベークライト製。ファインダーは透視式で、巻き上げはノブ巻き上げの赤窓確認方式である。ボックスカメラの流れをくむシンプルな構造になっている。

続いて主な国産カメラを紹介する。「ファーストカメラ」(図12)は名刺判乾板カメラで、栗林写真機製作所で製造され、1935年に皆川商店から発売された。

昭和初期は大名刺判のガラス乾板を使うハンドカメラ全盛期で、レンズとシャッターはドイツから輸入し、ボディは国内で製作というものが多かった。その後、時代の潮流はロールフィルムに向かった。



図12 ファーストカメラ

オプトクローム社から1937年に発売された「ツバサクローム」はその後、新型・A型など改良型が発表された。第2次世界大戦が勃発し、戦時色が強くなった1939年に発売された「ツバサアラワシカメラ」(図13)は安価で売り出された青少年向けの機種。<sup>(5)</sup> 127フィルムのベスト半載判(画面サイズ4×3センチ)の16枚撮り。



図13 ツバサアラワシカメラ

「ミノルタフレックスⅡ」(図14)は、1950年に千代田光学精工(現コニカミノルタ)から発売された。戦後最初に作られたミノルタの120フィルム二眼レフカメラである。1937年に発売され、ドイツ製品が主流であった時代にすべて自社製品で開発し、高い水準の技術力を知らしめた「ミノルタフレックスⅠ」の改良型。ロコールレンズははじめてコーティングが施された。ピントフード前面と右側面に2つのボタンが付き、瞬間的に開閉できるようになった。焦点調節はくり出し式で、フィルムは自動巻き止めである。



図14 ミノルタフレックスⅡ

「ピジョン 35Ⅲ」(図15)は1952年に信濃光機から発売された35ミリレンズシャッターカメラの大衆機のひとつ。ピジョン35Ⅱの改良型でダイキャストボディとなった。巻き戻しノブが引き出し式に変わり、ボディシャッターが前面に付いた。日本初のフィルム送り用レバーが採用され、操作が簡便になった点が注目される。

第二次大戦後、数多くのカメラメーカーが生まれ、今日の日本のカメラ産業隆盛の礎となったが、多くの中小メーカーは消えていった。信濃光機もその一つであった。



図15 ピジョン35Ⅲ

1954年から1964年までの10年間は国産カメラの発展期と言われる。35ミリカメラのメーカーが増え、日本における特色あるカメラを開発し、海外のメーカーと競争する力をつけた。1965年以降は電子制御化が進み、海外メーカーをリードすることとなった。

理研光学工業(現リコー)は、1953年に初めて35ミリレンズシャッターカメラ「リコレット」を発売し、その後リコー35シリーズとして次々と新製品を発表した。「リコレットⅡ」(図16)は1955年に発売された。ギアによる前玉回転式距離計連動、フィルム巻き上げと同時にシャッターがセットされるセルフコッキング式を採用し、自動巻き止めの機能が付いた。



図16 リコレットⅡ

「タロン 35」(図17)も1955年当時にさまざまなメーカーから売り出された35ミリレンズシャッターカメラの一つ。シャッターはNKS-MX

(B, 1~1/300 秒) でセルフタイマーを内蔵した。セルフコッキング式を採用。一眼式連動距離計で、連続スピード撮影に優れていた。NKS シャッターのメーカーの日本光測機工業株式会社から発売された。



図 17 タロン 35

カメラメーカーとして長い歴史のある栗林写真機製作所は、1955 年にシリーズ最初の 35 ミリレンズシャッターカメラ「ペトリ 35」を製造し、以後次々と新型を発表した。「ペトリ 7」(図 18) は 1961 年に発売された。距離計のファインダー窓にグリーンフィルターを採用し、距離計・連動露出計が連動する。露出計はレンズの周りに配置されたサークルアイ式セレン光電池である。



図 18 ペトリ 7

「マミヤ 35EE メリット」(図 19) はシャッター速度優先 AE (自動露出) 機構を内蔵したカメラ。1962 年にマミヤ光機から、初心者層をターゲットに、誰にでも簡単に写せる最も進んだ EE (Electric Eye) カメラとして売り出された。露出計および AE 機構はセレン光電池で作動する。露出表示 EE の時、ファインダーをのぞくとブライトフレーム下部に 2.8~22 の絞り目盛があり、メーターの指針が絞り値を示す。ピント調整はゾーンフォーカス式。



図 19 マミヤ 35EE メリット

富士写真フイルム (現富士フイルム) も 1955 年に初めての 35 ミリレンズシャッターカメラ「フジカ 35M」を発売した。カメラの上部についていた部品を取り去ったデザインが特徴であった。「EE のかべを破った世界で初めてのカメラ」とのうたい文句で発売された「フジカ 35 オート M」(図 20) はコパルマジックという複式プログラムのシャッター機構を採用した AE カメラ。シャッター速度優先の AE カメラだが、露出が適正外になると自動的にシャッター速度が補正される独特の機構であった。



図 20 フジカ 35 オート M



図 21 キヤノネット QL19E

「キヤノネット」は 1961 年に誰でも写せる使いやすいシャッター優先 AE カメラとしてキヤノンカメラ (現キヤノン) から発売され、爆発的に

売れた。「キヤノネット QL19E」(図 21) は 1965 年に発売された。QL はクイック・ローディングの略で独自のフィルムの簡易装てん機構をさす。電子制御式のセイコーES プログラムシャッターを使用し、キヤノン初の電子シャッターを採用した。

「キヤノンデミ EE28」(図 22) は、1963 年からキヤノンカメラ発売したコンパクトカメラのデミシリーズ最終機種。1967 年に発売された。測光露出はセレン光電池使用によるプログラム式 AE。中距離の 3m 位置にフォーカシングリングを合わせると、パンフォーカス(被写界深度内)になるゾーンマークが付いていた。



図 22 キヤノンデミ EE28

1960 年代後半にはフィルムが高価でなくなっており、倍の枚数が写せるハーフサイズカメラのメリットも次第に薄れ、一眼レフの時代へと移っていった。

1962 年に旭光学工業から発売された「アサヒペンタックス SV」(図 23) は、前年に発売された完全自動絞りの 35 ミリ一眼レフカメラ「アサヒペンタックス S3」の後継機。SV で初めてセルフタイマーが内蔵された。裏ぶたを開くとフィルムカウンターがリセットされる初の自動復元式フィルムカウンターが搭載された。露出計は内蔵され



図 23 アサヒペンタックス SV

ていないが、着脱式専用露出計を接続することができる。

「トヨビューデラックス 4×5」(図 24) は 1961 年に酒井特殊カメラ製作所(現サカイマシンツール)から発売された大判カメラ。上野誠氏が仕事で使用していたカメラである。1959 年発売の第 1 号機「トヨビュー4×5」の改良型で、アオリ、スライディングの角度、標準蛇腹の脱着など性能および材質を大幅に改良している。



図 24 トヨビューデラックス 4×5

このほか、寄附いただいた中にはカメラ以外のカメラ関連資料として 1950~60 年代のフラッシュガンやフラッシュバルブ、電気露出計、フィルム類などの資料がある。



図 25 ハンザ マグネシウム発光器

「マグネシウム発光器」(図 25) はマグネシウム粉末に酸化剤を混ぜて発火させる。後ろにぜんまい式のネジがあり、ぜんまいがもどると発光する。フラッシュバルブよりも光が柔らかい。ポンという音がするので、ポン焚きと呼ばれた。マグネシウム粉末を発火させて光源とする歴史は古く、1893 年ごろからあった。これは、1910 年ドイ

ツのアグファが開発したものと同型で、大光量フラッシュバルブが普及する 1955 年代までに、主に営業写真の分野で使われた。



図 26 ミニカム シンクロマスター フラッシュガン  
東芝 フラッシュランプ・閃光電球

この「シンクロマスターフラッシュガン」(図 26) は専門メーカーのミニカム製。フラッシュバルブを取り付け、シャッターと同調させて電流を流すとバルブ内のタングステン線が燃え、球の中に飛び散り発光剤に引火して大光量を発する。安価な携帯ストロボが普及する 1970 年ごろまで使用された。これも上野氏が仕事で使用していたものである。



図 27 セコニック電気露出計 L-28 スタジオメーターS

電気露出計は光電池を使って、光の明るさの強弱を電氣的な強弱に変えて被写体の明るさを数値的に測定する。これにより絞りとシャッタースピードの正しい組み合わせができる。「L-28 スタジオメーターS」(図 27) はセコニック社が 1957 年ブロックウェイ社と技術提携し、「ノーウッドディレクター」をモデルとして製造した。発売以来幾多のモデルチェンジを経て長く製造された入射光式露出計の定番である。

35 ミリフィルムも今や若い世代にとってなじみのないものになりつつあるが、日本で普及し始めたころの 35 ミリフィルムのパトローネは大変貴重な資料といえよう。

富士フィルムはアマチュア写真需要が増大してきた 1953 年から 1958 年にかけて、相次いで、35 ミリフィルム S (ASA50), SS (ASA100), SSS (ASA200), F (ASA32) を発売した。当時はロールフィルムが主要製品であったが、1960 年には 35 ミリフィルムが出荷量でロールフィルムを上回った。翌年には暗室装填用フィルムの価格に近い価格に設定し、全てパトローネ入りフィルムに切り替えている。商品パッケージの基調色がグリーンになったのは 1958 年であるので、紫、藍、オレンジなどのパトローネはそれ以前のものと思われる。(図 28)



図 28 35 ミリフィルムパトローネ  
(富士フィルム・小西六写真工業-右端)

上野氏がプロのカメラマンとして長年愛用してきたカメラやアクセサリ類は、今や貴重なカメラ技術史の一部を物語る資料である。また、子ども向けカメラの収集により、これまでのコレクションに広がりが増えることとなった。当館サイエンスドームギャラリーでの新収蔵資料紹介展で展示した際は、年配者から、幼い子を連れた親子連れまで、トイカメラなどの展示に興味深く見学する姿が見られた。

また、コダック No.2 ブローニー、ミノルタベスト、スタート 35 ジュニア S、マミヤスーパー 16 など上野氏所蔵のカメラで撮影した紙焼き、フィルム等を参考資料として、寄附していただいた。現在では入手が困難なフィルムを使用するカメラでの貴重な写真であり、カメラの展示を充実させるものとして活用したい。

### 3 山田写真荘寄附カメラ関連資料について

山田写真荘は寄附者の叔父が東京都大田区に1945～46年頃に開業し、2009年まで地域の写真館として営業していた。顧客の中には、近くに住む作家の三島由紀夫などがおり、歴史ある写真館であった。靱山将英氏は、山田写真荘に30数年間勤務されていたが、2011年に店を整理するにあたって、佐倉市在住の兄靱山貞美氏の助言により、木製組立暗箱など写真館ならではの貴重なカメラ等61点を寄附してくださった。（別添資料一覧2）

まず木製組立暗箱関連資料の内訳は、①組立暗箱5点（うちキャビネ判4点、八つ切り判1点）、②撮り枠9点（うちキャビネ判6点、八つ切り判3点）、③キャビネ判の撮り枠の中に入れてサイズの小さい写真を撮影するための撮り枠中板2点、④三脚5点（うちキャビネ用4点、八つ切り1点）、⑤レンズ2点、⑥ローラーブラインドシャッター2点である。

組立暗箱にレンズ、シャッター、撮り枠、三脚を取り付けて使用する。組立暗箱は蛇腹を畳むと平らになり、軽量で持ち運びがしやすいので出張撮影に重宝した。

キャビネ判組立暗箱のうち2点と八つ切り判組立暗箱は無銘であるが、キャビネ判組立暗箱のうちの1点には「浅沼商会 感謝号」の金属製のタグが付いている。（図29）浅沼商会は1871（明治4）年創業の日本最初の写真材料商で、欧米メーカーのカメラ、レンズ、写真用品機材の輸入販売、写場用カメラ（アンソニー）、野外フィールドカメラの製造販売をした。創業50周年を機に各種サイズの組立暗箱、スタジオカメラなどを「感謝号」と命名して発売した。



図29 木製組立暗箱「感謝号」

残り1点には「KONISHIROKU TOKYO」のタグがつけられている。1873（明治6）年に東京麹町の写真及び石版印刷材料の取扱店としてスタートした小西屋六兵衛店（現コニカミノルタ）は、浅沼商会とともに、日本の写真産業の発展に先達の役割を果たした。

撮り枠はいわゆるフィルムホルダーで、キャビネ判や八つ切りなどの乾板をはさんで使用した。（図30）



図30 木製組立暗箱用撮り枠

レンズ2点はどちらも1886年創業のドイツベルリンのゲルツ社のレンズ。うち1点は「感謝号」用のレンズ「ダゴールレンズ 21 cm F6.8」（図31）、もう片方はレンズシャッター方式の「ダゴールレンズ 21 cm F6.8 シャッター：コンパー」で無銘の木製組立暗箱に装着が可能。シャッターから考えて1930年代と思われる。



図31 木製組立暗箱用レンズ ダゴール

「木製ローラーブラインドシャッター」（図32）は写場用大型カメラのレンズ前面に取り付ける方式の幕状のシャッター。ロールブラインドシャッターとも呼ばれるが、日本ではこのシャッターを発売したイギリスのソルントン＝ピカード社から「ソルントンシャッター」と呼ばれる。シャッ

タースピードの設定は 1/15, 1/30, 1/45, 1/60, 1/75, 1/90。収蔵した2点のうち1点には旧近江屋写真用品のブランド「ハンザ」の銘がついている。(6)



図32 木製ローラーブラインドシャッター

大判カメラは2点ある。「リトレックビューカメラ」(図33)は武蔵野光機(現ウイスタ)から1965年に発売された軽合金ダイキャスト製、完全アオリ付きの5×7センチ判暗箱式カメラである。八つ切、キャビネ、4×5ロールフィルムまでカバーする。当資料には残念ながらピントグラス、レンズなどは付いていない。このほかドイツのカメラメーカー、リンホフの「カルダンカラー45S」も収蔵した。こちらはニッコールWレンズが装着されている。4×5インチ判スタジオ用ビューカメラである。



図33 リトレックビューカメラ

中判カメラは4点である。「リトレック」は1957年に発売されたアルミダイキャスト製の箱形中判一眼レフカメラ。写真館や商業的目的で使用された。ボディのみの収蔵である。

「マミヤユニバーサルプレスブラック」(図34)は1971年にマミヤ光機(現マミヤ・デジタル・イメージング)から発売された中判プレスカメラ。

1969年に発売された「マミヤユニバーサルプレス」の軍艦部とトリムのクロームメッキ部をすべてブラック仕上げにしたタイプ。アダプターを使用すれば、6×9, 6×7, 6×6など各種フォーマットに対応でき、豊富な交換レンズシステムにより、出版や報道関係などで広く愛用された。本資料にはポラロイドフィルム用レンズ、マミヤセコーLPとポラロイドのフィルムバックが装着されているので、ポラロイド撮影用として使用されたと思われる。



図34 マミヤユニバーサルプレス ブラック

1982年に発売された「マミヤ RZ67 プロフェッショナル」(図35)は1970年発売のレボルビングバッグ機構を備えた「マミヤRB67 プロフェッショナル」を電子化した6×7判一眼レフカメラ。レンズ側とボディ側の電気接点により、AEファインダー、ワインダー、リモートコントロールなど相互の電子情報化を可能とした。このほかボディのみの同機種も収蔵した。



図35 マミヤ RZ67 プロフェッショナル

インスタントカメラが1点あり、これは各種の証明写真専用に富士写真フィルム(現富士フィルム)が開発した「フォトラマFP-UL」(図36)である。1990年に発売された。ピント位置は1.2mに固定されており、各種コンバーターレンズを交換

することにより、小判・中判・大判サイズの証明写真を撮影できる。2つのレンズをそなえており、パスポート用写真を一度に2枚撮影することも可能である。



図36 フォトラマ FP-UL

この「フォトラマ FP-UL」のコンバーターレンズ「コンバーターR」（運転免許写真用）と「コンバーターC」（就職・受験写真用）の2点が、偶然にも2009年受入の小久保コレクションに含まれている。あわせてインスタントカメラの技術を知る良い資料となった。

いずれも写真館ならではのプロ仕様のカメラであるが、このほか個人で所蔵されていたカメラを靄山貞美氏より寄附していただいた。そのうちの2点を紹介する。

「オリンパスペンS」（図37）は1960年にオリンパス光学（現オリンパス）から発売されたハーフサイズカメラ。オリンパスペンシリーズはハーフサイズによる小型軽量化、リヤワインディングフィルム巻き上げ、Dズイコーレンズの優れた描写力という特徴と35ミリフィルムを2倍使えるという経済性により、1960年代から70年代にかけてブームを巻き起こした。「オリンパスペンS」は前年に発売された第1号機「オリンパスペン」のレンズをDズイコー30mm F2.8の明るいレンズに変え、シャッターに低速が加わった改良版である。



図37 オリンパスペンS

オリンパス OM シリーズは35ミリ一眼レフカメラで世界最小最軽量のボディとトータルシステムを実現し大ヒット商品となった。プロフェッショナル向け製品の OM 一桁シリーズに対して普及版シリーズとして開発された OM 二桁シリーズの「オリンパス OM-10」（図38）は1979年に発売された。当時最新の TTL ダイレクト測光方式を採用し、マニュアルアダプターを装着することにより、マニュアル撮影ができた。普及価格のモータードライブやストロボ、標準ズームレンズも同時に発売され、人気を集めた。



図38 オリンパス OM-10

山田写真荘（靄山将英氏）からの資料には、カメラ及び関連資料のほか、スイスの精密機器メーカー、パイヤールの8ミリシネカメラ「ボレックス B8」（1950年代）やアメリカシカゴの製造メーカー、リベアカメラの8ミリプロジェクト「リベアモデル85」他、編集機やフィルムなど映像関係資料10点も含まれている。映像関係資料としてまとめ、別の機会に紹介したい。

#### 4 小久保勝弘氏寄附カメラ関連資料について

小久保氏からは、カメラ35点（レンズ付きフィルム1点を含む）、レンズ2点、ストロボおよび関連資料5点、その他カメラアクセサリー類5点を寄附していただいた。カメラは35ミリレンズシャッターカメラ、35ミリフォーカスプレーンシャッター一眼レフカメラ、16ミリフィルムカメラ、110カメラ、APSカメラ、連続写真専用カメラ、レンズ付き写真フィルムとバラエティに富んだものとなっている。（別添資料一覧3）

主なカメラについて年代を追って紹介する。

16ミリフィルムカメラは3点ある。千代田光学精工（現コニカミノルタ）の「ミノルタ 16 P」1

点と「ミノルタ 16 MG-S」2点である。

「ミノルタ 16 P」は「ミノルタ 16」(1957 年発売)の普及型として 1960 年に発売された。フィルム送り、シャッターチャージ機構を改良してボディ後部のダイヤルで行うようにした。シャッターは 1/100 のみ。お天気マーク (絞り) で適正露出を得る。簡潔で非常に合理的な構造の使いやすいカメラとして評価された。



図 39 ミノルタ 16 MG-S

「ミノルタ 16 MG-S」(図 39) はミノルタ 16 シリーズの中で頂点とされる機種である。「MG」(1966 年発売)のセレン露出計を CdS 受光体にし、シャッター優先の AE 方式に改良して、1969 年に発売された。画面サイズを JIS 規格の 12×17 ミリに拡大し画質が向上した。

110 カメラは 4 点収集した。「ポケットフジカ 350 ズーム」(図 40) は 1976 年に富士写真フイルム (現富士フイルム) から発売された。ポケットカメラで初めて明るいコンパクトズームレンズを付けた高性能機である。画面は連動するズームファインダーで確認できる。露出は分かりやすいお天気マーク式が採用され、レバーを左右に動かすだけでロングからアップまで多彩な撮影が楽しめる。



図 40 ポケットフジカ 350 ズーム



図 41 オプティマ 6000 ポケットセンサー

「オプティマ 6000 ポケットセンサー」(図 41) は 1976 年にドイツのフィルムメーカー「アグファ・ゲバルト」が発売した独特のデザインと機構を持つ 110 カメラ。オプティマセンサーシリーズ最高級機でセルフタイマーを内蔵している。オレンジ色のシャッターボタンが特徴である。

110 カメラ残り 2 点は「セルビマイクロ 110」で、上野氏からの寄附と同じであるが、こちらは黒とローズ色の本体の色が異なる種類を収集することができた。

35 ミリレンズシャッターカメラは 13 点である。「リコー 519 デラックス」(図 42) は理研光学工業 (現リコー) から 1958 年に発売された。前年発売の「リコー 35 デラックス L」のレンズを F2.0 から F1.9 に変更し、価格を下げたタイプ。絞りとシャッタースピードの組み合わせを数字に置き換え、露出量が倍変わると数字が一段変わるように決めたライトバリュースャッターというシステムを装備している。フィルム巻き上げは速写性のあるトリガーレバーを採用している。



図 42 リコー 519 デラックス

「オリンパス 35EC2」(図 43) はオリンパス光学工業 (現オリンパス) から 1971 年に発売された。「オリンパス 35EC」(1969 年発売) は最大 4 秒と



図43 オリンパス 35EC2

いう長時間露光を可能にするセイコー社のプログラムシャッターに加え、外付けストロボによるオートフラッシュマチック機構を装備し、“エレコン”の愛称で親しまれた。「オリンパス 35EC2」は、電源警告装置、レリーズロックをつけたECの改良型である。カメラ内に使用している電池の電圧が下がるとシャッターレリーズがロックされ、電源不良による露出不良などの失敗を未然に防ぐ。



図44 コニカ C35 EF（改良型）

「コニカ C35 EF」は小西六写真工業（現コニカミノルタ）から1975年に発売された。カメラにフラッシュを内蔵させ、「ピッカリコニカ」の愛称で大ヒット商品となった。これ以降、絶縁性を確保するため、本体構造に積極的にプラスチックを利用するようになり、同時に軽量化、低価格化が図られた。当資料はその1年後に発売された「コニカ C35 EF」の改良型。（図44）シャッター速度1/60, 1/125, 1/250の3段階となりセルフタイマーが内蔵された。

あわせて「コニカ C35AF」も収蔵した。こちらは1977年に「ジャスピコニカ」の愛称で親しまれた世界で初めて商品化されたオートフォーカス

機である。アメリカハネウェル社のVAFモジュールというセンサーを利用し、被写体までの距離を自動検知するシステムを搭載した。のちのコンパクトカメラの原型となった。

オリンパス光学工業のXAシリーズは「小さく軽く、ポケットに入れても気にならないカメラ」というコンセプトから生まれたコンパクトカメラのシリーズ。1979年に発売された初代「XA」はバリアー式のレンズカバーを採用し、本格的なカメラとしてはじめて、ボディや各所部品にプラスチック素材を使用した。翌年に発売された「オリンパス XA2」（図45）は「XA」に初心者向けの改良が加えられた。フォーカスの切り替え忘れを防ぐため、レンズカバーを開閉すると、自動的に中距離に戻る。カメラとしてはじめて通産省グッドデザイン大賞（1981年）に選ばれた。



図45 オリンパス XA2

1980年代半ばには多焦点のコンパクトカメラが登場する。「リコーTF200D」（図46）は1986年にリコーから発売されたワイドとテレ（望遠）の2焦点コンパクトカメラ。レンズ設計技術の進歩と樹脂材料や成型の新技術により、それまでのコンパクトカメラの大きさを大きく変えることなく2焦点のレンズを組み込むことができた。



図46 リコーTF200D

1980 年代後半から 1990 年代にかけてはオートフォーカス、自動巻き上げ、ストロボ内蔵などコンパクトカメラの全自動化が進んだ。

「京セラ T-PROOF」(図 47) は 1995 年に京セラから発売された全自動 35mm コンパクトカメラ。ドイツのレンズメーカーの名門カール・ツァイスの T\*レンズ (テッサー-35mm F3.5) を搭載し人気があった。生活防水機能を備え、ウエストレベルファインダーがついており、カメラを構えなくとも上からファインダーをのぞけるしくみになっている。



図 47 京セラ T-PROOF



図 48 フジ 連写カルディア ビューン

カルディアシリーズは富士写真フィルム (現富士フイルム) のコンパクトカメラのシリーズ。ズームレンズや連写機能などを備えた機種がそろっていた。「フジ 連写カルディア ビューン」

(図 48) は 1991 年に富士写真フィルムから発売された連続写真専用カメラ。シャッター 1 回切ると、フィルム上にはパノラマサイズ (13×36 mm) 2 画面分に 8 コマの撮影が行われ、1 回の巻き上げで 2 画面相当のフィルムが送られる。動体の速さに合わせて、中速: 2 秒, 高速: 1.2 秒, 超高速: 0.3 秒から連写スピードを選ぶことができた。

35 ミリ一眼レフカメラは 6 点収蔵した。1985 年にミノルタカメラ (現コニカミノルタ) から発売された「ミノルタ α7000」は世界初の本格的 35 ミリ AF 一眼レフカメラ。ボディ内に AF 駆動用モーターを内蔵し、マウント面の AF カプラーを通してレンズの焦点機構をすばやく作動させ、焦点を合わせる方式を初めて実用化し、充実したシステムを揃えたカメラとしてヒット商品となった。

「キヤノン T80」(図 49) は「ミノルタ α7000」発売直後にキヤノンから発売された 35 ミリ AF 一眼レフカメラであるが、オートフォーカス焦点検出装置を内蔵したもので、性能的には対抗できるものではなかった。撮影モードの設定に外部 LCD (液晶) 表示によるピクトグラフ (絵文字) 選択式を採用したことが特徴である。



図 49 キヤノン T80

2 年後の 1987 年、キヤノンから発売されたのが、交換レンズ内に駆動用モーターを内蔵し、レンズの制御に必要な電源と情報は全て電気接点を介し伝達される完全電子制御化マウントを採用した「EOS 650」(図 50) である。新開発の超音波モーターによって作動音が静かですばやく反応するオートフォーカスを実現、高い評価を受けた。



図 50 EOS 650

同年「EOS 650」の上位機種として「EOS620」が発売されたが、カメラとして世界初の有機EL 照明付き液晶パネルが搭載された。EOS シリーズはその後も新技術を取り入れたカメラを発表し、一眼レフの市場を活性化させた。



図51 ミノルタ 7700i

1988年にはαシリーズの第2世代となる「ミノルタ 7700i」(図51)が発売された。iは”インテリジェント”の意味で、露出制御関連の機能追加などをICカードで行う。オートフォーカスセンサーを3カ所に増やし、動体予測オートフォーカスを搭載した。この後、オートフォーカス一眼レフがマニュアル機のシェアをしのご、主流となっていく。

APS（アドバンスドフォトシステム）対応フィルムカメラは4点ある。富士フィルム、イーストマン・コダック、キヤノン、ミノルタ、ニコンが共同開発したIX240フィルムを採用したAPSという新しい写真システムのカメラが1996年に各社から発売された。



図52 ハローキティ エピオン

「ハローキティ エピオン」(図52)は1997年に富士写真フイルム（現富士フイルム）から発売された。前年の1996年に発売された「エピオン10」の機能を基本にした単焦点AFコンパクトカメ

ラである。エピオンシリーズは1996年に1桁～4桁の機種で展開した。

「ニコン プロネアS」(図53)は操作が簡単なコンパクトカメラのメリットと一眼レフカメラのもつ高性能・高機能をあわせもつカメラとして1998年に発売された。発売当時はレンズ交換式AF一眼レフカメラの体積比で世界最小であった。APSの利点として、カートリッジに入ったIX240フィルムが35mmフィルムに比べ小型であるために、カメラ自体も小型化できることや、撮影途中でフィルム交換ができることなどがあげられる。しかし、撮影面積が小さい<sup>(7)</sup>ことから画質が劣り、交換レンズの互換性に問題があることなどから、同時期に普及しだしたデジタルカメラに押されあまり普及しなかった。



図53 ニコン プロネアS



図54 コンタックス U4R

デジタルカメラは2点あり、そのうちの1点「コンタックス U4R」(図54)は京セラから2004年に発売された。ファインカムブランドの「SL400R」をベースにし、カメラ外装に牛本革を使用したカメラである。カール・ツァイスがデジタルカメラのために開発したT\*レンズを搭載。<sup>(8)</sup>デジタルカメラで初めてD3端子に対応し、撮影した画像を高品位テレビで再生できる。400万画素。

## 5 おわりに

この他に竹内洋子氏から「ポラロイドポケット I-Zone Xiao GAIKOKU」(図 55) を寄附いただいた。ポラロイドと玩具メーカートミー(現タカラトミー)が共同開発した。ポラロイド・ポケットフィルムを使用し、24mm×36mm の小さなプリント写真がその場でプリントできる。シャッター速度とピントは固定されているが、自動露出、フラッシュ自動調光を実現した簡便な機構のカメラで、1999 年に世界各国で発売されたインターナショナルバージョンである。



図 55 ポラロイドポケット I-Zone Xiao GAIKOKU

公益財団法人千葉県教育振興財団からは大判カメラ 2 点と中判カメラ 1 点を譲り受けた。上野誠氏、靱山将英氏からの寄附と合わせ、プロ仕様のフィールドカメラ、ビューカメラの充実を図ることができた。

カメラ及び関連資料は点数でいえば当館収蔵資料のうちの実物資料の約半分を占めるが、その中にはカメラアクセサリ等も含まれ、また重複して収蔵しているカメラもあり、現状でカメラの技術史を追うまでには至らない。博物館資料の購入費が付かない現状では、日本カメラ博物館の「日本の歴史的カメラ」等で評価されているカメラなどを積極的に収集できるものではない。しかしながら今回御紹介した、長年にわたり当館の収集活動に御協力くださっている佐々木須磨子様、小久保勝弘様、上野誠様、靱山将英様、靱山貞美様はじめ、これまでに寄附くださった方々によって当館のカメラコレクションが少しずつ充実し、ある程度技術的な進歩等がたどれるようになった。皆様には厚く感謝申し上げます。

カメラと併せて寄附いただいた、カメラに関する図書や「アサヒカメラ」などのカメラ雑誌、カメラショーや製品カタログなども大変重要な資料で

あり、今回の報告を執筆するにあたり、再度データの見直しをする際に大変役に立った。しかしながら、不明の個所や追加・訂正の必要なデータもあると思われるので、お気づきの点があれば情報をお寄せいただければ幸いです。

収集したカメラおよび関連資料は、これまで「開館 15 周年記念 収蔵資料展『カメラの世界 - なつかしの名機・大衆機たち - 』」(平成 21 年 10 月 10 日～11 月 23 日)の他にも、「昭和のクラシックカメラ - 佐々木コレクションから - 」(平成 19 年 2 月 17 日～3 月 18 日)を企画展示室で開催している。また、サイエンスドームギャラリー展示において「カメラコレクション」(平成 20 年 9 月～12 月に 3 期に分けて展示)<sup>(9)</sup>、「新収蔵資料展示」(平成 24 年 3 月～6 月に 2 期に分けて展示)と公開に努めてきた。今年度新たに収集したカメラ等資料についてもサイエンスドームギャラリーで紹介していく予定である。

今後は、収蔵資料展やカメラ展だけではなく、さまざまな企画展やコーナー展示等に活用していくことも考えられる。カメラの逸品や技術史上重要なカメラばかりを展示するのではなく、もちろん当館ならではの評価による展示があろうし、産業や科学技術に関する企画展の趣旨に合わせ、例えばレンズを取り上げるなど切り口を工夫することにより、カメラおよび関連資料のさらなる展示活用を図ることができよう。

収集したカメラの保管、整備、評価、そしてこれからどのようなかたちで収集を進めていくべきかなど検討すべき課題は多々あるが、専門の方々の教をいただきながら当館の特色あるコレクションを作り上げられれば良いと思う。

## 参考文献

- すぎやまこういち他編「国産カメラ図鑑」朝日ソノラマ(1985)
- アサヒカメラ編 酒井修一監修「昭和 10～40 年 広告にみる国産カメラの歴史」朝日新聞社(1994)
- マニュアルカメラ編集部編「往年のオリンパスカメラ図鑑」樫文庫 018 樫出版社(2003)
- マニュアルカメラ編集部編「往年のキヤノンカメラ図鑑」樫文庫 031 樫出版社(2003)

藤田一咲著「ポラロイドの時間」 榎文庫 116 榎出版社  
(2006)

飯田鉄, 良心堂著「ハーフサイズカメラ遊楽」 榎文庫 125  
榎出版社 (2006)

(財)日本カメラ博物館運営委員会編「デジタルカメラヒストリー」 日本カメラ博物館 (2007)

(財)日本カメラ財団歴史のカメラ審査委員会編「日本の歴史のカメラ[増補改訂版]」 日本カメラ博物館(2004)

(財)日本カメラ博物館編「日本の歴史のカメラ[増補改訂版]」 日本カメラ博物館(2009)

神立尚紀著「図解・カメラの歴史」ブルーボックス [新書]  
講談社(2012)

「カメラ年鑑」1977年版・1979年版 日本カメラ社

「カメラレビュー別冊クラシックカメラ専科」

朝日ソノラマ

- 4「名機の系譜」(1984)・7「カメラコレクターのための国産カメラ特集 キヤノン編/ニコン編」(1986)・9「35mm一眼レフカメラ」(1987)・10「小西六カメラの歴史/二眼レフ再発見」(1987)・12「ミノルタカメラのすべて/コンタックス物語前編」・14「リコーカメラのすべて/全国クラシックカメラコレクター情報」(1989)・15「レンズ/全国クラシックカメラ博物館展示館ガイド」(1990)・18「戦後中判カメラの再発見/ベスト半截判(3×4cm)判カメラの魅力」(1991)・20「オリンパスのすべて」(1992)・26「ヤシカ・京セラ・コンタックスのすべて」(1993)・35「日本のカメラ50年特別号」(1995)・36「マミヤのすべて」(1995)・44「富士写真フィルムのカメラ」(1997)

Commercial Photo Series 通巻29号「スタジオ・ポートレート  
の技法 営業写真の世界」(1977)

「70 JAPAN CAMERA SHOW (カメラ総合カタログ Vol. 37)」  
(1970)

(註)

- (1) 豊川公裕：当館収蔵のカメラコレクションについて  
平成19年度「千葉県立現代産業科学館研究報告」14  
(2008.3)
- (2) 豊川公裕：当館収蔵のカメラコレクションについて  
(その2)平成21年度「千葉県立現代産業科学館研究  
報告」16 (2010.3)
- (3)平成24年度分も寄附及び保管換えによりカメラ関連  
資料を38点収蔵したが、執筆時点では確定していな

かったため、今回の報告には含まない。

- (4) 発売年は不明だが、1989年に岩田エンタープライズ  
から発売された「セルビ リボルバー」以降と思わ  
れる。
- (5)「荒鷲」は勇猛な戦闘機や搭乗員を指す名称。
- (6) 上野誠氏からの寄附資料にも木製ローラーライン  
ドシャッター2点が入っている。
- (7) 画面サイズ16.7mm×30.2mm
- (8) 35ミリ判換算で38ミリ～115ミリ相当のカール・ツ  
ァイス・バリオテッサールレンズ。
- (9) 川端保夫・金田幸代・豊川公裕：収蔵資料を活用し  
たサイエンスドームギャラリーの展示と収蔵資料の  
管理について平成20年度「千葉県立現代産業科学館  
研究報告」15 (2009)